

栗山雄佑著 『〈怒り〉の文学化』テクスト — 近現代日本文学から〈沖繩〉を考える

後山剛毅

着陸態勢にはいるKC-135空中給油機に向けられた〈怒り〉かのように、本書の書影は赤々と燃えている。〈怒り〉の炎を高解像度に読み解く本書の試みのように、その赤は微妙なグラデーシオンを帯びている。ひとりの男がフェンスの向こう側を覗いている。そこは、フェンスのこちら側よりも濃い赤で表現された不可視の領域である。KC135はまさにその地帯に降り立とうとしている。男はその不可視の領域を凝視し続けている。

本書は、著者である栗山雄佑が二〇二二年に立命館大学文学研究科に提出した博士論文「近現代「沖繩」文学研究——ジェンダー・暴力批判・戦争記憶継承」に加筆・修正が加えられ、序章と終章を含む四章分の書き下ろしが追加されたものである。

終章において著者が言及しているように、本書のもとになった博士論文が提出されたのは、二〇二〇年という戦後七十五年、九年九月の少女暴行事件から二十五年という年であった。新型コロナウイルスのパンデミックのまえに、「世界は恐怖」し、「沖繩

のみならず〈戦後〉七五年、事件から二五年という節目が後景化した感は否めない^①」状況だった。広島・長崎の平和記念式典は縮小され、それは沖繩の「慰霊の日」においても同様であった。現実の世界を包む「恐怖」によって、過去に失われた〈声〉やいままさに失われつつある〈声〉に向き合うことが困難となった空気のなかで、本書に収められた〈声〉の多くが拾われた。著者は、フェンスの向こう側の不可視な空間から残滓として聴こえてくる〈声〉を拾い集め、これらの〈声〉を通じて十年後の世界への祈りを提示しようとした。

著者は、一九九五年が戦後五十周年の節目であり、阪神・淡路大震災やオウム真理教がサリンを散布したテロルが発生した年として認識——集合的に記憶されていることを述べつつ、沖繩では別の出来事の記憶が想起される年であると述べる。それはさしずめオムニバス映画のような構成だ。それぞれの作品をさまざまな形で表出する／あるいは抑圧された〈声〉がたらぬいてはいるが、それぞれの章の内容は、章単位でも強度を持った主題を提示

している。それらが〈声〉というテーマに収斂されているのが本書の特徴だ。九・一一同時多発テロをテーマに、十一人の映画監督がそれぞれ一分九秒〇一の長さで撮影したオムニバス映画のなかで、一九七三年九月一日のチリ・クーデターをひとりケン・ローチが想起したように、著者は一九九五年という集合的記憶に抗つて個々の〈声〉を拾おうとしている。

本書の目的を著者は、「性暴力の記憶が沖繩県内外でいかなる〈怒り〉を生み出したのか、それが各作家の文学的想像力によっていかに受容され、文学テクストとして発表され、読者にいかなる変容を与えたのか、を明らかに^①」することと説明する。それは、一九九五年の米軍による少女暴行事件をめくつて想起される戦時性暴力の記憶と対峙することでもある。その際に著者はある〈声〉に耳を傾けながらも、それが実際に現在の沖繩に存在する〈声〉を収集することではないことを明確に主張している^②。著者は、今ある沖繩の〈声〉を掬いあげるためにこそ、過去から到来する〈声〉に耳を傾ける。著者が注目するのは、沖繩の〈怒り〉を想起可能なものとしてアーカイブのなかに「仮固定」することではない。それは文学作品のなかにすでに書き込まれた〈怒り〉の〈声〉と対峙することである。

ここで、本書の内容を簡潔に整理しよう。ただし、評者は〈沖繩文学〉に明るくない。そのため、三つで構成されたパートの主題と、それぞれの章のなかで気になった点についてのみ触れることとする。第一部は、沖繩のなかでその存在の声が抑圧されてきた人々の声を拾い上げている。第一章の「ギンネム屋敷」論では、不可視の〈怒り〉が可視化された金銭へと変換され、第二章の

「ジョージを射殺した猪」論では、フェンスの向こう側の想像力が喚起される。「平和通りと名付けられた街を歩いて」論では、天皇制批判によつて、天皇制を批判することが抑圧されるといふ困難が、著者による解析を通じて可視的な領域へと浮上してくる。これらと作品はどれも、フェンスのこちら側にとつてのあちら側の領域を眼差すものであり、著者は、こちらとあちらを区別してそのどちらかに与する読み方によつて却つて、作品のなかに埋もれている〈声〉を見失つてしまつてことを明確に描き出している。

第二部では、目取真俊の作品読解を通じて、一九九五年九月以降の沖繩における性暴力とそれに対する対抗暴力の諸相を捉える試みがおこなわれる。第二部で扱われる作品は、目取真の「希望」、「虹の鳥」、「水滴」であり、「水滴」の議論のなかで戦時・戦後そして現代におけるさまざまな暴力の様相を〈記憶〉した徳正という身体は、第三部のテーマである記憶と接触したことで変化する身体の問題へと連なるものとして提示されている。

第三部では、「ふとしたぎつかけで戦時記憶に〈接触〉し、それによつて身体を〈変化〉させた人物を描き出す作品」が論じられ、とくに「眼の奥の森」で描かれるような、「戦時における性暴力の記憶が現代に連続していく沖繩において、対抗暴力で解決し得ない記憶を抱える人物、あるいはさまざまな暴力に晒されてもなお〈そこまでして生きないといけない〉人物が見せる問題」が論じられる。第九章では、崎山多美「月や、あらん」を論じている。著者は、「月や、あらん」が企図したものが、戦時性暴力におけるノイズとされた声への対峙といった読解を契機に、さまざまなマイノリティが発する〈ノイズ〉への対峙と、論者を

含む読者の読みをも拡張させていくことにあると見ることができる。⁶⁾と述べ、沖繩における「女性と社会の関係、沖繩内に埋もれる米軍兵士による女性への性暴力、児童虐待、格差社会といった沖繩社会の諸問題の中で〈ノイズ〉化する声が「ヨメて」くる⁶⁾」可能性を示唆するものへと崎山のテクストが変化したことを示している。また第十章では、目取真俊「眼の奥の森」が論じられ、ここでは第二部で主に論じられた対抗暴力の行方として、人々が暴力に対して自身の暴力性が発露することを自覚することと、「非暴力性」を獲得することが明示される。

ここにすべての章の内容を記述することはできていないが、そうであったとしても本書が論じる問題の多様さを読み取ることは難しくないだろう。最後に本書と原爆の問題の関係について触れて、本稿を閉じることとする。

本書は「原爆」という主題を扱ったものではないが、著者は別稿において、「沖繩文学」と「原爆文学」のあいだに次のような接点を提示する。著者は、後藤みな子の「炭塵の降る町」と「平和大通り名付けられた街」において、「母親」らがともに〈狂気〉を発したことに注目し、それが「挙行される皇族——戦争責任者であり、〈国家の象徴〉の訪問において、車列を追いかける／に飛び出す行為として発露した」ことに近代日本におけるジェノサイドと天皇制の影響を見ようとする。⁶⁾〈声〉を聞くこと、あるいは〈声〉にも満たない「ノイズ」のような〈嘆き〉を聴くこと。それは原爆以後の世界ではそぼそと続けられた苦みである。原民喜が死者たちの嘆きに耳を傾けたように、そして大田洋子が〈原民喜〉の声を聞くこととしたように。また「平和通りと名付

けられた街を歩いて」というタイトルは、広島島の「平和大通り」の記憶とも交差するだろう。大田洋子「夕風の街と人と 一九五三年の実態」における平和記念都市として復興していく広島市にたいする違和感と、その過程で聴かれることのなかった多くの〈声〉が想起される⁷⁾。

〈沖繩〉、〈長崎〉、〈広島〉、そして近代日本の歴史のなかでうち捨てられてきた無数の〈声〉を、著者が今後どのようにしていくか、そしてその〈声〉をどのように表現していくのか期待される。

(二〇二三年三月二五日 春風社 四四三頁 四二〇〇円十税)

注

1 栗山雄佑、『怒り』の文学化——近現代日本文学から〈沖繩〉を考える』春風社、二〇二三年、四三四頁。

2 前掲、七頁。

3 前掲、一三頁。

4 前掲、三七五頁。

5 同前。

6 栗山雄佑、「母の〈狂気〉を聞く」『原爆文学研究会会報』第六九号、二〇二三年、一頁。

7 岸佑、「広島」と「ヒロシマ」の間——平和記念公園の史的研究』『C』比較文化』四二号、二〇〇九年、二四三—二七四頁、福岡良明、「慰霊祭」の言説空間と「広島」——「無難さ」の政治学』『現代思想』四四卷一五号、二〇一六年、二二六—二二七頁など。